

ある二つの不倫小説

——ジャンフルーリ『モランシャルの市民たち』と
フローベール『ボヴァリー夫人』をめぐって——

滝澤 壽

はじめに

古今東西を通じて不倫などという結婚契約の違犯行為は事新しいものではないし、これをテーマとした文学作品は枚挙に暇がない。しかし、その「卑俗さ」故にこそ、ボードレールが皮肉にも言い放っているように、「とりわけて虚構を目の敵にし、ただ所有のみしか愛しない、完全に衰微した——いや、衰微したよりもなお悪い——愚鈍化した貪欲な社会」に安閑とする「十九世紀の読者」にとって、この「もっとも使い古された、もっとも身を売り果たした題材」、「もっとも鳴り疲れた手廻し風琴」は、恰好の話題であった。⁽¹⁾

後世「西欧文学におけるもっとも重要にして広範な不倫小説」⁽²⁾と称される運命を担うことになる『ボヴァリー夫人』と苦闘中であつた無名のフローベールは、1854年の夏、「プレス」紙に連載されたジャンフルーリの『モランシャルの市民たち』を目にする。同年生まれではあつたが、既に新流派「リアリズム」の旗手として華々しい活躍をしていたジャンフルーリのこの小説は、一時フローベールを不安に陥れる。田舎を舞台にして、不倫という同一のテーマを扱っていたからである。結局、類似は皮相であつたし、しかもこの時期には執筆段階が第二部のほとんど終わりにまで達していたこともあり、直接ジャンフルーリの作品の影響を受けたということはあるまい。けれども、杞憂に終わったとはいえ、不安は恐らく意識を時にかすめたであろうし、先行作は創造過程にあつて反面教師の役割を果たしたことは推測に難くない。従つて、ジャン・ブリュノーの言葉を借りれば、「フローベールはその作を結末づけ、見返しながら、ジャンフルーリ的小説を考慮に入れ得たが故に益々、これら両小説は注意深く比較されるに値しよう」⁽³⁾。しかし、筆者の知る限り、最近における両作品のいささか詳しい比較研究はわずかに二論文に止まる。⁽⁴⁾本論考はこの空隙を埋めることを目指す。

I. ジャンフルーリと『モランシャルの市民たち』

ジャンフルーリ、実名ジュール-フランソワ-フェリックス・ユッソン、通称フルーリと言つても、フランス・リアリズムの歴史にその名を留めているのみで、今日その作品が顧みられることはほとんどないだろう。しかし、リアリズム運動初期の最大の理論家、小説家が、後輩のデュランティエと共にこのジャンフルーリであることは衆目の一致するところだ。彼はパリの北方、ピカルディ地方エヌ県の県庁所在地、ゴシック揺籃期の大聖堂で知られるランに生まれた。奇しくもボードレール、フローベールと同じ1821年である。父は市役所の官吏、母は家計の一助に玩具屋を営んでいたと言う。余り豊かではない家庭の、しかも

第三子であったからか、いわゆる高等教育は受けていない。1838年の夏16歳でパリに出、書籍取り次ぎ店で働きながら、文学の道に踏み出す。1839年、当時未だ文学青年であったミュルジュールと知り合い同居、ボヘミアン仲間と付き合う。この時の体験をもとに、独創的才能のみで金も何もないエッチング画家、場末の屋根裏部屋に一羽の兎と暮らし、ついには発狂する芸術家をリアルに描いた『犬っころ』(Chien-Caillou)を1845年に書き、1847年同名を冠した短編集として自費出版、ユゴー、ボードレール等に認められる。これより先の1844年、同郷人アルセーヌ・ウーサーが発行していた「アルティスト」の美術批評を担当している。いつの時代でも芸術諸ジャンルの活動は分かち難いものであるが、ジャンフルーリもレアリスムの画家クールベを擁護して、この運動の中心人物となっていく。先のボードレールとロマン派、ことにドラクロワ、そして後のプラトと印象派との関係にも比せられよう。評論集『レアリスム』(1857)の序文でも明確にしているように、「芸術の真摯さしか認めない」彼は、銀板写真(daguerréotype)のように見たままをありのままに描く真摯な文学を主張、コントラスト等のロマンティスムの手法を排する。そのことは瑣末、卑俗、凡庸なものの羅列主義、作品の平板化に墮する危険を孕んでいたし、事実、時としてその弊に陥り、世の非難を招いた。しかしそもそも前衛としての新流派が指弾的とならなかつたためしはなく、ギュスターヴ・プランシェが美術の新傾向を指して1837年に初めて使ったとされる「レアリスム」なる用語、そして「レアリスト」なる呼称も当時であつては貶めた言葉、いわば蔑称であつた。⁽⁵⁾ 1889年の死に至るまで、研究・評論・脚本等を含む数多くの作品を残したが、20編余りに及ぶ長編小説の代表作には以下のものが挙げられよう。『マリエット嬢のアドベンチャー』(Les Aventures de Mademoiselle Mariette, 1853), 『モランシャルの市民たち』(Les Bourgeois de Molinchart, 1855), 『ドゥ・ボワディヴェール氏』(Monsieur de Boisdyver, 1856), 『デルティユ教授の苦悩』(Les Souffrances du Professeur Delteil, 1857), 『ル・カミュの相続』(La Succession Le Camus, 1857)。

ジャンフルーリの小説のうちでもっとも人口に膾炙した作は、10万部は売れたという『モランシャルの市民たち』である。1853年1月から11月にかけて執筆され、翌54年7月21日から8月21日まで「プレス」に連載、55年リブリー・ヌーヴェルから単行本として上梓されている。先ずかいつまんで梗概を記しておく。

ラーン近郊ののどかな田舎町モランシャルに、徐々に住民を興奮させる騒動が持ち上がる。森から迷い出た一頭のノロジカが町に侵入し、群衆と猟犬に追われて食料品店に逃げ込み、次いで隣の代訴人クルトン・デュ・コシュ氏の家に入り込む。夫人のルイーザは——彼女がヒロインとなるのだが——恐怖に怯えながらも、通りがかりのジュリアン・ドゥ・ヴォルジュ伯爵にシカの助命を嘆願する。この奇縁が二人を結び付け、不倫の恋が芽生える。けれども、この珍事に引き続いて町のお歴々を招いて代訴人の家で催された晩餐会等さまざまな機会はあるものの、ヒロインの消極性故にこの恋はそれ以上に発展しない。ところがある日、弟の財産を狙う代訴人の姉ユルシュルおよびこれと結託した寄宿学校教師シャップ夫人、この二人の悪女の陰謀の罠にはまり、ルイーザはさらわれるようにジュリアンとパリに駆け落ちするに至る。しかし幸福な日々は長続きせず、日陰の暮らしに馴染めないルイーザは次第に故郷の平穏な生活を懐かしむようになる。そして遂に、二人の愛が冷めんとする間に、夫の告発により伯爵は逮捕される。

作者が知悉した故郷の小さな町を舞台に、その住民の生態と風俗を軽妙に活写した風刺小説である『モランシャールの市民たち』には、微細な観察家と才気ある風刺家の目が随所に感じられ、観念的解釈を避けた純粹客観描写には見るべきものがある。しかし問題は、そうした逐一の細部の断片が有機的な統一体として総合され切れていないうらみがあり、従って田舎町とその住民の現実生活、生活風俗のリアリティーが全体として十分には浮かび上がって来ないことだろう。また後に検討するように、ヒロインたるルイズの性格造型に難があり、加えて登場人物の内面描写と外界の描写がややともすれば遊離しがちであることが指摘されよう。

結論的にいえば、確かにシャンフルーリとその小説は今日の日からは、マイナーな作家であり作品に止まる。けれども、フローベールに至って芸術的完成を見るリアリズム文学の流れにおいて果たした役割は大きく、またそうした歴史上の功績は別にしても、改めて見直されるべきものが多々あるように思われる。

II. 『モランシャールの市民たち』に対するフローベールの反応

既述のように、『モランシャールの市民たち』は1854年7月21日から「プレス」に連載が開始されるが、これはちょうど『ボヴァリー夫人』第二部の終わりを執筆していた時期に当たる。フローベールも早々にこの小説を読んだらしく、無二の親友ルイ・ブイエ宛8月2日および8月10日付けの手紙の中に読後感を書きつけている。前者は最初の5回分、後者は全22章のうち11章目時点での反応であるが、二通を比べてみると、当初の衝撃と不安が読み進めていくうちに次第に解消され、逆に自作への自信を深めていることが読み取れよう。とりあえず該当部分を訳出すれば次のごとくである。

「シャンフルーリの小説の連載五回分を読んだ。率直に言って、ひどい作じゃない。——主題とか性格とかよりも、むしろ狙いが同じだ。夫とその妻と愛人の性格は僕のものとは非常に違っているように思える。この妻は天使のようだし、それに詩情に陥ると、小説がきわめて局限され、進展がなく、そして表現はほどほどに旧弊なロココ調だ。ただ一つ困ったことは、『ボヴァリー』における嫁の敵たる姑ボヴァリー夫人のように、ヒロインの敵（彼女の義姉）たる信心に凝り固まった老嬢の性格なのだが、この性格がシャンフルーリにあっては非常に上手く示されている。——その点が僕にとって今までのところ最大の類似であり、しかも老嬢のこの性格は僕のお姑さんのそれよりずっと良く出来ている。もともと僕の本ではきわめて副次的な人物なのだが。

文体はと言うと、しっかりしていない、全然だ。そんなことより、『ボヴァリー』を今刊行出来ないのが残念至極。まあ、言っても始まらないけれど。

『ウージェニー・グランデ』を読み直した。本当に美しい。——シャンフルーリ君とはえらい違いだ。』⁽⁶⁾

「シャンフルーリの小説の十一章まで読んだ。読み進むにつれてほっと一安心している。コンセプトと調子がきわめて違っているんだ。君か僕でもなければ、誰も比較なんてしないと思う。二冊の本でただ一つ似ていることは環境だが、それだってどうかな。』⁽⁷⁾

これに対してブイエは同年9月、即ち連載が終了した後、次のような返書を送っている。

「もっとも、シャンフルーリの小説が龍頭蛇尾に終わることは分かっていた。いつも彼には起こることなんだ。完璧だとも、基礎がしっかりしているとも思わない。

動機づけされた精神錯乱と君が言うことは正鵠を射ているようだ。そうなんだ、旧弊なロココ調だね、よくよく考えて見れば。余りにドラマティック過ぎる、言葉の悪い意味でね、だから君が慎重に慎重を重ねて本当に良かった。」⁽⁸⁾

この手紙からも、フローベールがシャンフルーリの小説構成法、即ちルイズの不倫を義姉ユルシュルのいじめと陰謀という専ら外的な要因に帰する手法に批判的であったことが読み取れよう。いずれにせよ、フローベールの心配は杞憂にすぎず、『ボヴァリー夫人』への精進はさらに一年半余続くことになる。他方、シャンフルーリはかの有名な文学裁判の受難に際して二通の励ましの手紙を送り、遅れてデビューした同輩の文壇的処女作の輝かしい成功を予言している。

なお、炯眼の批評家でもあったボードレールは両作家とその作品について論評しているが、フローベールを高く評価したのに対し、旧知の仲のシャンフルーリを必ずしも買っておらず、時には戯画化してさえいる。参考までに、後者に関連する抜粋を二つ引いておく。

「シャンフルーリはリアリズムを身につけて廻っている。〔……〕 シャンフルーリは、詩人であって〔……〕 いたずら者の素質をもっている。〔……〕 もろもろの事物が彼の前にいささか幻想的な様相をもって立ち現れるとすれば、それは少々近視の彼の眼の収縮のゆえだ。——自分が細密に研究するものだから、外部の何か現実を把握していると思ってしまう。そこからして、リアリズムということになる、——彼は自分の手法とと思っているものを、人に押しつけようとするのだ。」⁽⁹⁾

「シャンフルーリは、子供っぽく愛すべき精神をもって、^ど絵画的^レ情趣^スの裡にきわめてみごとに遊んでみせ、その詩的な（彼自身思っているよりもっと詩的な）鼻眼鏡を、家庭や街路のおどけたもしくは感動的な出来事や偶然のもろもろに向けたのだった。だが、独創性のゆえか視力薄弱のゆえか、故意にであるか宿命的にであるかは知らないが、月並みという共同の場、群衆の出会いの場、雄弁の公に会合する場を無視したのだ。」⁽¹⁰⁾

III. 『モランシャールの市民たち』と『ボヴァリー夫人』の比較分析

前章までの考察を踏まえて、本章では田舎を舞台に愛と結婚の孕む諸問題を追究した両小説を比較しつつ詳細な分析を試みる。

バルザックという「驚異の流星」⁽¹¹⁾の消失（1850年）から程経ぬ奇妙な空白の時代に筆を執る者は誰でも、壮大な『人間喜劇』の世界を意識しない訳にはいかないし、とりわけ結婚の枷に辛苦する女性をテーマにしようとする時には、『三十女』のような先例に意を留めざるを得まい。もっとも父権制の下での妻の自立の要求と葛藤という基本構造は程度の差こそ

あれ保持されてはいるが、シャンフルーリにあってはフローベールにあっては夫の存在の絶対性は大幅に減じられ、より身近な夫婦関係が基盤になっている。とは言え、妻の不倫に至る過程が、前者の場合愛人となるジュリアンの視点からいわば外的に捕らえられることが多く、従って夫婦間の微妙な軋轢よりはヒロインを夫の支配の手から救い出そうとする企てが主要な関心事となっている。確かに「この若妻は、やがて結婚の敵に貪られ……」(M. p. 24)⁽¹²⁾と叙述されてはいるが、日常性に嵌まり込んだ結婚生活への幻滅、倦怠そしてフラストレーションが強調されることはなく、またそれらが不倫へと駆り立てる動因にもなっていない。既述のように、ルーズが不倫に走るのには、自己の意志と選択というよりむしろ偶然である。年齢の離れた代訴人の夫は考古学や骨董趣味に向かい、妻をかまわず、その不倫を知った時の反応についてさえほとんど語られることはない。それに対して、周知のようにフローベールはエマの裏切られた夢と現実を執拗なまでに描き出し、それが小説の起爆剤となっている。さらに、冒頭と終局に客観的視点と夫となるあるいは夫シャルルの視点を配し、そして物語の中心部をヒロインの視点が占める、かくしたパースペクティブの円環的転回は、彼女の心奥と行動とその悲劇を重層的に照らし出す巧みな構成である。

不倫の三角形の要は当の行動をなす者であろうが、両ヒロインの性格造型はこの基本構造の相違を決定づけている。先に紹介したように、フローベールはシャンフルーリのヒロインを「天使のようだ」と評した。事実、ルーズは天使のような、さらに形容すれば忍従と献身の女である。結婚以来「この十年、代訴人の妻は絶対的な献身を余儀なくされた」(M. p. 24)のだ。夢に生き、生の意欲に溢れたエマとは言えば、翔ぼうとして遂に墮ちた男性社会の犠牲者ではあるが、他方において夫や薬屋オメーに代表される凡庸さと俗悪さ、少なくとも彼女がそう思うものに耐えられぬ要求多き女である。ルーズは絶えず自己を抑制し、受け身の姿勢に終始する。若き伯爵の接近に彼女のなすことと言え、逃避と抵抗のみである。ある夜会でワルツを踊れば、「身も心も動転させる格別の感覚を覚えつつ、もう二度と伯爵とは踊るまいと誓う」(M. p. 32)のだ。これはヴォピエサールの館でエマが子爵と踊るワルツの陶醉、官能の目眩きとまさに対照をなしている。この差がどこから来るかと言え、それは妻のそれぞれの夫への対し方に求められよう。「ルーズは夫に罪があるとは思えないので、自分に罪があると考えていた。クルトン・デュ・コシュ氏のエゴイズム、妻に示すまったくの無関心も断罪の絶対的な動機とは思えず」、「この恋に打ち勝つことが出来ないが故に不幸だと考え、これを断罪されるべきものと思っていた」(M. pp. 271-2)のに対し、「家庭生活の平凡さは彼女(エマ)を華麗な幻想に、夫婦の愛は不倫の欲望へと駆り立て」(B. p. 111)⁽¹³⁾、「茫然とまどろむ意識の中で、彼女は夫への嫌悪を恋人(レオン)への憧れと思い誤った」(B. p. 127)のである。そして夫の無能を世間に知らしめた湾足手術の失敗は、不倫を自己正当化する契機となる。「今はもう夫の一切がいらだたしかった。夫の顔、夫の身なり、夫が口に出して言わないこと、夫の全身、つまり夫の存在がいらだたしかった。エマは過去の貞操を罪悪のように悔いた。そして今も跡を留めている貞操の名残は、自負心に激しく打ちめされて崩壊した。エマは勝ち誇った不義の、あらゆる邪悪な皮肉を味わい楽しんだ。恋人(ロドルフ)の思い出が目眩めくような魅惑をもって蘇った。」(B. p. 190)こうしたエマが「詩の天空に翔ぶばら色の翼の大きな鳥」(B. p. 41)であるとすれば、ルーズは、その家政婦がいみじくも言うように、「屠殺場の牛」(M. p. 290)である。ファミ・フ

ァタルの典型の一人であるエマが他人を、そして自分をも破滅に追い込んでいくのは、愛の一つの究極の形であろうし、またある意味では最高の女性崇拜の表明とも言えよう。しかし、ルイズのような消極的受動的な女に、不貞の妻になる内的な必然性を見出すことは困難だ。そこでジャンフルーリは外的な要因に頼らざるを得ない。即ち、先に梗概でも記したように、弟夫婦の仲を割いて財産を狙う義姉の老嬢ユルシュルとこれと結託したシャップ夫人の陰謀である。パリへの駆け落ちも、二人に騙されてジュリアンに会うのがそもそものきっかけとされているのである。「『まあ、あなたがここにいらしたの』と若い女は茫然として言った。『では、騙されたんだわ』」(M. p. 266)

こうした相違は冒頭に提示される両ヒロインの外貌描写にも暗示されている。エマが若い生命力が弾けるその姿で往診に来たシャルルをいきなり魅了するのに対し、ルイズは例のノロジカ侵入事件で気を失い、彼女を介抱するジュリアンにそのか弱い姿を印象づける。この状況設定が先ずきわめて象徴的だろうし、またヒロインの理想化にも大きな差が見られる。例えば二人の手の描写は次のようだ。

「シャルルは彼女の爪の白さに驚いた。きらきら光って先が細く、ディエップの象牙細工よりもきれいにみがきがかかって、先尖りに切ってあった。しかし手は美しくなかった。白さがたりないようだし、関節が少し骨張っていた。それに長過ぎて、輪郭に柔らかみがあった。」(B. p. 16)

「伯爵は上流社会の人間ではあったが、こんなにも柔らかで、こんなにもしなやかな手に今まで触れた覚えがなかった。そしてその手は少しばかり静脈を見せていた。実際、顔や全身と同じように、皮膚は少し褐色がかってはいたが、青い無数の細い静脈が気まぐれに戯れ、もつれ合っていた。」(M. p. 31)

そして目の描写、ここでも失神しているせいでもあるか、動と静の対照。

「彼女の美しいところは目であった。茶色のくせに睫毛のせいで黒く見えた。あどけなく大胆に、ぐっと見すえるような眼つきであった。」(B. p. 16)

「ルイズの黒い大きな目は、彼女の線維のなかでもっとも人に訴えかける部分を形作っていた。けれども閉じられていたので、その目は瞼を彩る褐色があった黄金の格別な魅力を放っていた。」(M. pp. 31-2)

フローベールが抑圧された生命力と官能性を強く示唆するのにひきかえ、ジャンフルーリは口に無垢の純粹さを表徴させてその描写を終える。

「エマ嬢は当て物を縫おうとした。〔……〕縫っているうちに何度か指を突いた。するとそれを口へ持って行っては吸った。」(B. P. 16)

「杯を触れ合わせてから口もとへあてた。グラスはほとんど空なので、彼女はそり返って飲んだ。仰向いて、唇をとがらせ、首をのぼしながら、口の中になんの感じもないのをおかしかって笑うと、舌の先が美しい齒の間から出て、グラスの底をペロペロとなめた。」
(B. p. 23)

「半ば開かれた口は苦しみのない失神を示し、バラの木を渡って来たかのようなそよ風同然に純な息をもらしていた。」(M. p. 32)

人物描写を構成する一つ一つに大きな変わりはないのに、この隔たり。エマは血の通った生身の女であるのに対し、ルイズはまるで血の気の失せた人形だ。あるいはまた、印象派とアカデミーの新古典主義の絵画にも比されよう。

コキュたる夫の宿命であろうか、シャルルにしてもクルトンにしてもなにがしかの道化役を負わされている。しかしそれが結局エマには通じなかったにもせよ、シャルルの愛は真正であり、その死の後も「エマは草葉のかげから彼を墮落させ」(B. p. 349)、「長い一房の黒髪を両手に持って」(B. p. 356)彼女のもとへ呼び寄せるのである。そこにはファム・ファタルに魅入られた愚＝聖なる愛の殉教者の姿さえ認められよう。他方、クルトンの場合は結婚の動機からしておぞなりだ。「四十歳頃、代訴人は結婚の理法に惹かれるのを感じ、ルイズ・ティイ嬢と結婚した。この娘はその美貌でモランシャルの社交界で大評判になっていたが、しかし神から授かったものと言えば美貌だけであった。」(M. pp. 23-4)代訴人の現役を退いてはいたが「先生」と呼ばれ、勿体ぶってはいても、本来的に受動的で弱い性格の彼は姉の言うなりで、また「嫉妬深くなく」(M. p. 282)妻にも甘い。「クルトンさんは私を完全に自由にしてくれます。だからどんなささいな望みでも言えば、あれこれ申しませんわ。」(M. p. 81)けれども妻に対する態度の本質は、権威と優越感に安住した無関心と侮蔑にあるのかも知れない。(Cf. M. p. 126)いずれにせよ、「彼は自分を夫の鑑だと思っていた。実際、町中が幸せな家庭を褒めていたのだ。」(M. p. 26)従って、彼もシャルルとまったく同じ過ちを犯す。妻が倦怠から、夜会や舞踏会に通い、週一回夫の友達を招待しても孤独を癒せずにいるのに(Cf. M. p. 24)、「夫は妻の密やかな倦怠を夢想だにしなかった」(M. p. 26)のである。なんの変哲もない日々が繰り返され、自己満足にひたり切った夫の話も文字通り十年一日だ。

「十年来、彼は決して会話の種を変えたことはなかった。[……]彼女は夫の話に耳を傾ける、あるいはその振りをするのだった。ろくに聞かないで返事をするのに慣れてしまってさえいた。十五分おきに、『まあ!』とか『本当!』とか『まさか!』とかの合の手を入れる、するとおめでたい夫は妻が自分の話に大いに興味を持っていると思うのだった。」(M. p. 24)

フローベールはいささか奇抜な直喩で、エマの積もりゆく不満をもさらに鮮やかに映し出す。

「シャルルの会話は歩道のように平板で、そこには月並みな思想が、感動も笑いも夢もそらずに、普段着のままでもぞろぞろ歩いていた。」(B. p. 42)

「結婚の倦怠」にせよ「密やかな倦怠」にせよ、後の展開に重大な意味を持つこの病理を、フローベールは第一部を通じて、とりわけその最終章を費やして解剖してみせる。これに対し、ジャンフルーリは夫婦生活の最初の十年間をわずか二ページに圧縮し、しかも事実のみを羅列して無味乾燥な陳述に終始する。この結果、前者がヒロインの目に映じた結婚の悲惨な現実と彼女の内面が渾然となった表現を与え、読者をエマと一体化させることに成功している局面で、後者の客観的にして陳腐な叙述は、逆にヒロインと読者の間に距離をおかせてしまっているのである。

結婚生活の限界が認識される場面での差異も大きい。エマの思考が内へ内へと籠もっていき、決定的な焦点を結ぶのに対し、ルイズのそれは拡散し、束の間であれ忘却に到り着く。

「エマの考えは、最初は何のあてもなく、ちょうど彼女のグレーハウンドが野原をぐるぐる駆け廻ったり、黄色いチョウに吠えついたり、麦畑のへりのヒナゲシをかみながら、地ネズミを追いかけたりするように、ひょうひょうとさまよった。そのうち次第に考えがひとところに集まってきた。芝生に腰をおろし、日傘の先でそこを突つきながらエマは繰り返した。『ああ、なぜ結婚なんかしたんだろう』」(B. pp. 45-6)

「人の訪れることもまれな、しかし景勝を心から愛する人達にはフランスのもっともうるわしい情趣の一つを与える、この美しい場所を散歩しながら、ルイズはモランシャルという小さな町の捕らわれ人であることを忘れていた。[……]雲の形のように漠とした夢に耽って、若い女は一瞬自分の卑小な生活を忘れていた。」(M. pp. 28-9)

ルイズの逃避の姿勢は、エマの突き詰めた思い、深刻な認識と対極をなしていると言えまいか。「この自分の生活は、天窓が北向きについている納屋のように冷たい。憂鬱が、黙した蜘蛛のように、心の四隅の闇に巣をかけている。」(B. p. 46)

こうしたヒロインの希求に応えるべき相手の男はと言えば、エマには、娘時代修道院の寮で読み耽ったセンチメンタルな小説のヒーロー、白馬の騎士どころか、皮肉にも、内気な公証人書記レオンであり、また粗野でエネルギーな農場主ロドルフであったのに対し、ルイズには、理想化された型通りの恋人が配される。青年貴族のジュリアン・デュ・ヴォルジュは資産家で、ロマンティックな心の持ち主、しかも初老の夫とは異なり若さに輝いている。その彼がノロジカの追跡に興奮した群衆の前に、馬上に鞭を鳴らし颯爽と登場するや、恐怖の余り気を失ったヒロインを介抱する。まさに窮地の姫君を助けに駆けつけるヒーローであり、恋に落ちモランシャルの街々を徘徊する場面も、安手の騎士道恋愛物語を思わせる。詰まるところジュリアンの人物造型はこの域を出ず、装いは高貴でも浅薄で、レオンとかロドルフのように生きた人間の典型にはなり得ていない。しかしながら、「『私には恋人がいる！恋人がいる！』[……] 彼女はその恋を味わって悔いもなく、怖れもなく、悶えもなかった」(B. p. 167) とされる女ではなく、ジュリアンがサーカス一座の女軽業師との仲

をささやかれた時でさえ、「瞬く間に嫉妬の蛇が心を嚙んだ」けれど、「自分自身に逆らい、身を守るためにより一層の力で情念と戦おうと心に決めた」(M. p. 167, p. 185) 女には、伯爵のような男がむしろ似合いなのかもしれない。

今日ならば車というところであろうが、この時代には馬車が誘惑の最高の場であった。事実、両小説とも恋人の決定的な関係の場として、これを利用している。レオンとエマを乗せ、「窓掛けを下ろし墓穴よりも嚴重にしめ切り、船のようにゆれながら」、「動き病」にとりつかれたかのようにルーアンの町を疾駆する辻馬車 (Cf. B. pp. 249-251), こうした生々しい場面でこれほど巧みに馬車を生かし切った作家がいたであろうか。これに比べると、パリに駆け落ちするジュリアンとルイーゼを馬車の内部から描写したジャンフルーリの方が、先に述べた人物造型の理想化の帰結であろうか、一種ロマンスの世界を現出している。「彼ららはもはや人間でもなく、生ける者でもなかった。天上の抱擁のうちにめぐり会った魂であった。〔……〕二人の魂は一つに溶け合い、その周りで衛兵となって数々の思い出、悲哀、未来の懸念を追い払っていた。なにもものも、危難も危険も、この時彼らを分け隔てることは出来なかっただろう。二人は力と自由が漲るのを感じていた。」(M. p. 292) しかし時に即物的な視線が顔を覗かせる。「馬車は相変わらず走り続けていた。中では、鋼鉄の杵棒も折れんばかりの悲痛で狂熱の抱擁であった。」(M. p. 292) かくするうちに、一行有余の中断符号が突然現れる。究極の場面で視覚表現を放棄し、空白に頼らざるを得なかったところに、作家的力量の不足をここでも云々するのは酷に過ぎようか。

『ボヴァリー夫人』が本格的な不倫小説であることに異議はあるまいが、『モランシャルの市民たち』にあっては、不倫も田舎風俗の一つのエピソード——無論大きな比重を占めてはいるが——に過ぎないのかもしれない。ただし、原点に立ち戻ってみれば、題名からして後者は一田舎町の不特定複数の普通名詞であり、前者は「地方風俗」なる副題は付されていても、本題は紛れもなく単数の固有名詞なのである。しかし、それにしてもジャンフルーリの場合、地方生活の事件も描写も羅列の感が強く、有機的な繋がりがいかにも希薄である。例えば、ルイーゼがジュリアンの母ドゥ・ヴォルジュ伯爵夫人と共に出席する寄宿学校の賞状授与式に丸一章を費やししながら、ヒロインに関して意味あることは何も起こらず、ただいささかのユーモアを込めて式の模様が語られるだけなのだ。これに比べて、フローベールはこの地方最大のイベント農事共進会を、田舎の風俗と生態をない交ぜにしつつ、お歴々の長広舌と恋の口説きを平行的に進展させ、「人間愚」の視覚・聴覚的一大絵巻=交響楽に仕立てあげている。多元的なあらゆる要素を重層=総合化し、すべてを不倫に収斂させていく力業は見事と言うほかはない。他方、ジャンフルーリは駆け落ちとパリでの一年余の生活を、二十章「幸福」および「ジュリアンからジョンキエールへ」と題された最終章をなす回想の手紙、その最後の数ページに圧縮してしまっている。しかし、ここで提起されている諸問題は、展開如何によっては豊かな可能性を持っていたはずである。けれどもそれらはすべて萌芽のままに留まっている。一時の興奮が冷めると、日陰者であるという恥の意識がルイーゼを捕らえ、マドレーヌ広場界隈でいかかわしい女たちを目にした「その日から、薄幸な女たちの豪華な暮らしをもはや続ける気はしなかった。」(M. p. 303) しかも、どんな愛も時の風化は免れず、疑心と倦怠が忍び寄る。ジュリアンはその手紙に記している。

「ルイズが裏切るかと思った。〔……〕故郷の町とクルトン・デュ・コシュ氏の家を懐かしがっているのだろうか。〔……〕絶えずこんな考えが頭に浮かぶ。『夫を裏切ったのだから、お前も裏切るかもしれない。』〔……〕やがて、私の愛が失せてきた。〔……〕ルイズが私に飽きるのを非常に恐れていたが、実は彼女に飽きていたのは私だった。」(M. pp. 317-8)

これを突き詰めていけば、「二人はあまりなれ過ぎて、占有の喜びを百倍にもするあの驚異を感じる事が出来なかった。レオンが彼女に飽きたと同じだけ、彼女もレオンが鼻についた。エマは不倫のなかにも結婚のあらゆる平凡さを発見した。」(B. p. 296)と書きつけたフローベールの厳しい人間認識にも通じていたかもしれない。しかしこの土壇場で、ジャンフルーリは「デウス・エクス・マキナ」を登場させる。即ち夫の告発を受けた官憲にジュリアンを姦通罪で逮捕させ、結末としているのである。恋人同士の内的、必然的な力学によらず、最終の局面でもまた外的な力を導入せざるを得なかったところに、この小説の最大の弱点があると言えよう。ジュリアンの手紙の結び、即ち小説の末尾で彼自身書いている。「私はクルトン氏にいかなる特赦も求めたくはない。後日ルイズにまた会おう。しかし、それからだ！……」(M. p. 319)まさに「それから」なのであり、読者の関心もこの再び使用された中断符号にあるのだから。そしてまた、いみじくもボードレールが喝破したように、「ボヴァリー夫人は、彼女の裡にあるもっとも力強い、もっとも野心的な、またもっとも夢想的なものに関する限り、あくまでも男だった」⁽¹⁴⁾とすれば、この強烈な個性の内部からほとぼしる強靱な力による統一こそ、フローベールの小説の生命なのだから。

む す び

今日の我々の目から見れば、『モランシャールの市民たち』と『ボヴァリー夫人』の優劣は議論の余地もないし、フローベールの懸念など無用であったことは言うまでもない。しかしあえてこの問題を取り上げたのは、当時にあっては必ずしもこれが自明であった訳ではなく、むしろ事実としては、ジャンフルーリの小説の方がはるかに万人に受入れられたからである。『挑発としての文学史』のヤウス流に言えば、この逆転現象は読者の「期待の地平」に出現した新たな作品の「美的懸隔」によって惹き起こされた「地平の変更」と説かれるが、こうした一般原理論では実は何の説明にもならない。筆者がこの三つの用語の意味するところを、両作品に基づいて具体的に分析した所以である。それは同時にフランス・リアリズム展開の一断面の考察にもなり得ていよう。

それにしても、比較という方法論の限界から、いささかジャンフルーリとその作品を貶めてしまったかもしれない。それは必ずしも本意ではなく、本稿が当時の一般読者大衆の「期待の地平」を照射すること、ひいては過度に忘却の淵に沈められたものの復権をも企図していたことを、終わりにあたって確認しておきたい。

注

- (1) Cf, Charles Baudelaire, “*Madame Bovary par Gustave Flaubert*”, *L’ Art Romantique* (Paris : Œuvres Complètes de Charles Baudelaire, Conard, 1925), 398-400. なお, ボードレールの評論の翻訳は, 『フローベール全集』9(筑摩書房, 1968)所収の山田喬訳, および『ボードレール全集』II(筑摩書房, 1984)阿部良雄訳を基本とした。
- (2) Tony Tanner, *Adultery in the Novel* (Princeton : Princeton University Press, 1979), 235.
- (3) Flaubert, *Correspondance*, éd. Jean Bruneau, 3 vols, (Paris : Bibliothèque de la pléiade, 1980)2, 1261.
- (4) Pier Luigi Pinelli, “Une Emma Bovary à Loan : Louise Creton du Coche”, *Letterature*, 10(1987), 63-100. Tony Williams, “Champfleury, Flaubert and the Novel of Adultery”, *Nineteenth-Century French Studies*, 20(1991-92), 145-157.
- (5) Cf. ex. Baudelaire, “*Madame Bovary par Gustave Flaubert*”, 399.
- (6) Flaubert, *Corr.* 2, 562-563.
- (7) *Ibid.*, 566.
- (8) *Ibid.*, 968.
- (9) Baudelaire, “Puisque Réalisme il y a”, *Œuvres Posthumes* (Paris : Œuvres Complètes de Charles Baudelaire, Conard, 1939), 297-298.
- (10) Baudelaire, “*Madame Bovary par Gustave Flaubert*”, 397. ちなみに, 近視のシャンフルーリは実際「鼻眼鏡」を掛けていて, ボードレールによる鉛筆画肖像はよく知られている。
- (11) *Ibid.*, 395.
- (12) Champfleury, *Les Bourgeois de Molinchart*, 3^e éd. (Paris : Librairie Nouvelle, 1856). M. と略記。
- (13) Flaubert, *Madame Bovary*, éd. C. Gothot-Mersch (Paris : Garnier, 1986). B. と略記。なお, 翻訳は『フローベール全集』1(筑摩書房, 1965)所収の伊吹武彦訳を基本とし, 文脈の関係から多少の変更を行った。
- (14) Baudelaire, “*Madame Bovary par Gustave Flaubert*”, 401.

Sommaire

Etude Comparative sur les Deux Romans d' Adultère

— *Les Bourgeois de Molinchart* de Champfleury,
Madame Bovary de Flaubert —

Hisashi TAKIZAWA

Les Bourgeois de Molinchart et *Madame Bovary*, ces deux romans mériteraient d'être attentivement comparés, puisqu'ils traitent tous les deux des problématiques de l'amour et du mariage, et qu'ils arrivent à toucher à un thème similaire : adultère. D'ailleurs, Flaubert était en train de composer son roman quand celui de Champfleury a paru. Jusqu'à ce moment, il en avait presque été à la fin de la deuxième partie, il n'est pas question qu'il ait été influencé d'une façon directe par Champfleury, qui a néanmoins mis Flaubert en alarme à un certain degré.

Pour élucider ces problèmes posés autour de deux romans d'adultère, notre étude comparative se compose de trois chapitres comme ce qui suit.

Chapitre I Champfleury et *Les Bourgeois de Molinchart*

Chapitre II Réaction de Flaubert à l'apparition du roman de Champfleury

Chapitre III Analyse comparative des deux romans

Certes, le résultat de cette comparaison s'est avéré tout favorable à Flaubert, mais aussi nous avons bien constaté que Champfleury, trop souvent mal estimé, n'en était pas moins important en tant que réaliste.